「イスラエル建国史」

35　独立闘争１

『つのぶえ』紙に掲載された「イスラエル建国史」の過去記事は、ハーベストタイムのウェブサイト（http://www.harvesttime.tv/news-topics/history-of-israel/）で公開しています。

【これまでの流れ】
第２次世界大戦時、ナチスドイツの統治下にある国々でユダヤ人は強制収容所に送られ、大量虐殺されていった。そうした状況の中で、パレスチナやアメリカのユダヤ人社会はヨーロッパのユダヤ難民救済に奔走する。しかし、パレスチナの英政府がユダヤ難民の受け入れを制限し、ヨーロッパでユダヤ人虐殺が進むにつれ、それまではシオニズム（パレスチナの地にユダヤ人の故郷再建を目指す運動）と距離を置いていたユダヤ人も、ユダヤ人が主権を持つ国家の必要性を痛感せざるをえなかった。そして、それまではシオニズムに懐疑的だった米国のユダヤ人社会も、ユダヤ人国家の建設を目指すという基本方針を採択するに至るのである。

難民受け入れ拒否に怒り

戦時中、パレスチナのユダヤ人社会は、当然イギリスに協力したが、ナチドイツの虐殺から逃れてくる難民が、非合法移民（英当局の決めた移民割当て枠外の移民）であれば、出航地へ押し返され、或いは収容所に拘留されたので、戦争末期英官憲に対する反撥が次第に大きくなった。

急先鋒が新シオニスト機構（NZO）とその武装組織イルグン（民族軍事機構）であった。最高指揮官のジャボチンスキーは、戦争初期運動キャンペーンのためイギリスを発ち、ニューヨークに着いた。しかし、ベイタル青年運動のサマーキャンプに滞在中、1940年8月3日に心臓疾患で死亡した。5ヶ月足らずのアメリカ滞在であった。

ダビッド・ラジエル

ヤコブ・メリドール

後を継いだダビッド・ラジエル(1910～41)は、1941年にイラクでラシド・アリの親独反乱が起きた時、英軍と情報部に協力し、同志3名を率いてバスラへ潜入した。油田爆破が目的であったが、5月19日にドイツ機に発見され、ラジエルを含め3名が銃撃で死亡した。生残ったヤコブ・メリドール（1913～1995、後に経済相）は油田爆破には失敗したが、英軍に貴重な情報をもたらした。反乱に参加したイラク兵達がどんどん軍服を脱ぎ棄てるのを目撃し、反乱が永続きしないことを知ったのである。メリドールは、一時イルグンの指揮をとったが、1943年12月に指揮権をベギンに渡し、自ら進んで副指揮官となった。

対英協力から反英闘争へ

ベギンが反英闘争を開始したのは、1944年1月からである。連合軍の北アフリカ反攻（オペレーション・トーチ）で、ナチドイツ軍は1943年5月中旬最後の拠点チュニジアから駆逐された。更に、レバノンとシリアを支配するフランスのビシー政権軍は、英軍に対する抵抗力を失くし、パレスチナに対する枢軸国の脅威はなくなった。

しかしその一方で、死の収容所へのユダヤ人移送が進み、比較的大きいユダヤ人社会が残っているのは、フランスと枢軸国ハンガリーだけとなった。特にハンガリーは、本国に約45万、併合地域に約30万のユダヤ人口を抱え、ナチドイツからユダヤ人移送の圧力を何度もうけていた（ナチドイツは1944年3月に同国を直接支配し、5月から移送を開始した）。

このような状況のなかで、1944年1月にイルグンは次のような闘争宣言をだした。

「…我々は国際法上の地位を許されず…エレツ・イスラエルへの門は閉ざされたままである。英委任統治政府は、恥知らずにもユダヤ民族を裏切っている。彼等には、エレツ・イスラエルに存在する道義上の理由は全くない…ユダヤ民族と英委任統治政府との間に最早休戦はない。わが民は、同胞をヒトラーに引渡しているエレツ・イスラエルの英当局と戦う…いにしえの栄光を回復し、同胞に祖国と自由、尊厳と正義を取り戻すまで、戦いをやめない」。

ベギンは、反英闘争を民族独立を目的とする反乱と位置づけ、これは絶望的な人間の英雄的行為ではないと前置きし、「現代のユダヤの反乱を象徴するのは、マサダではなくモディインである。理由は至極明瞭だ。現代の反乱は、自然の感情によって生まれるだけではなく、常識と政治的論理によって裏付けられる。感情は英雄的行為を生みだす。論理は戦略をもたらす。そして、優れた戦略が勝利を約束する」と主張した(M・ベギン「反乱」。マカベアの反乱で知られるモディインは、ロッド南東のユダ山地の村。紀元前165年ギリシアの圧政に抗して勝利した)。ベギンの率いるイルグンは、闘争宣言をだした月に活動を開始し、英委任政府機関（移民管理事務所、土地登記所、税務署、警察、放送局など）を襲撃した。

ハガナの動向

シオニスト運動の主流派に属するハガナはベングリオンの強い要求で、シオニスト執行部の統制下におかれた自衛組織、という役割に徹した。ハガナは英警察の補助警察員として、警備の任についた。将来国の防衛に指導的役割を果す人々も、このなかから生まれた。参謀総長や国防相を歴任したモシェ・

モシェ・ダヤン（左）とイガル・アロン（右）

ダヤン（1915 ～ 1981）、独立戦争時パルマッハ隊指揮官としてガリラヤ地方やネゲブを死守し、後年副首相になったイガル・アロン（1918 ～ 1980）などはその例である。英軍は、正規軍の対応が難しいアラブ野盗団の横行や、テロリストの浸滲とそのゲリラ戦に手を焼いていたが、1936 年に着任した情報将校 O・R・ウィンゲートが、ハガナから選抜した若者を中心に、特別夜戦隊を編成し、ゲリラ戦を展開した。前記 2 人はその出身である（規則や前例にとらわれない異色軍人ウィンゲートは、シオニズム運動の支持者であったが、戦時中ウィンゲート兵団を率いてビルマ戦線で日本軍と戦かい、飛行機事故で死亡した）。ハガナの隊員達は実戦体験を通して実力をつけていた。

O・R・ウィンゲート

パルマッハの誕生

ナチドイツの中東侵攻が考えられる 1941 年 5 月、ハガナ司令部は防衛力の中核となる部隊の編成を決めた。名称をパルマッハ（急襲隊）という。いざという時に投入する戦略予備である。将来を見据えた編成であったが、まだナチドイツの中東侵攻の可能性がある頃で、英軍はゲリラ隊として使用することを考え、編成と訓練に協力した。パルマッハは、やがて精鋭部隊に成長した。パラシュート隊（前月号）の隊員は半数以上がパルマッハ出身である。

1943 年、ナチドイツの中東侵攻の脅威が消え、戦争が連合軍に有利になってくると、英軍は将来敵対勢力になることを恐れ、解体に躍起になった。そうはさせじと、パルマッハは地下に潜行した。隊員はキブツで生活し、月の内 10 日間を訓練にあて、残る時間は農作業と学習で過した。大戦終結の頃、兵力 2000（その 3 分の 1 は女子）、11 個中隊の編成で、いざという時に備え、秘かに訓練を続けた。

パルマッハの女性隊員

肚を括ったベングリオン

シオニスト執行部（ユダヤ機関）議長のベングリオンは、戦時中ロンドンを主な活動拠点にしていた。ヨーロッパ戦が終る直前の 1945 年 5 月 7 日、ベングリオンはオリバー・スタンレー植民地相に呼ばれた。スタンレーはベングリオンに次のように言った。

「イギリス政府は、ユダヤ、アラブ双方の要求の板ばさみにあい、対応に苦慮している。米ソ両首脳がユダヤ人の建国を支持しているのは知っているが、イギリスはアラブ民族との紛争を望まない。委任統治を長くは続けられない」。

植民地相の話を聞いて、ベングリオンは次のように判断した。

「イギリスが撤収すれば、アラブ諸国軍のパレスチナ侵攻は必至である。私には、我々以外に頼る者がいないのは、明らかであった。スターリンすらユダヤ国家案に賛成することは判っている。しかし、彼が血を流して我々のために戦ってくれることはない。我々は独りである。」（ベングリオン『イスラエル私史』）

肚を据えたベングリオンは、予想される事態に備えアメリカのシオニスト達と協議するため、5月15日にロンドンを発った。戦備増強の為、ベングリオンは重火器、そして兵器生産用の工作機械の取得を考えていた。

DP キャンプに流入する生残った人々

太平洋戦争の終結を以て、第二次世界大戦は終った。戦火に荒廃したヨーロッパには、700 万から 900 万の戦災民が路頭に迷っていたが、1945 年末までに 600 万以上が本国送還で出身地に戻った。しかし、行き場のない人々がいた。強制収容所の生残りユダヤ人である。その数 20 万。彼等は、シェレイト・ハ・ペレタフ（生残っていた人の意、歴代誌 4 ～ 43）と呼ばれ、ほかの集団とは区別され、一括して扱われていた。DP（離散民）キャンプに居たが、そこは元の強制収容所である。ほぼ全員がエレツ・イスラエル（イスラエルの地）行きを望んでいた。キャンプ住民の数は時間がたつうちに増えていき、しかもそこには奇妙な動きがみられた。

【次号へつづく】

DPキャンプ

ユダヤ・中東研究家　滝川 義人

1937 年長崎県生まれ。
早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968 ～ 2004）として勤務。
現在、MEMRI（メムリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。
主要著書：『ユダヤ解読のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。